



(昭和35年生)

「学 寮 O B 会」

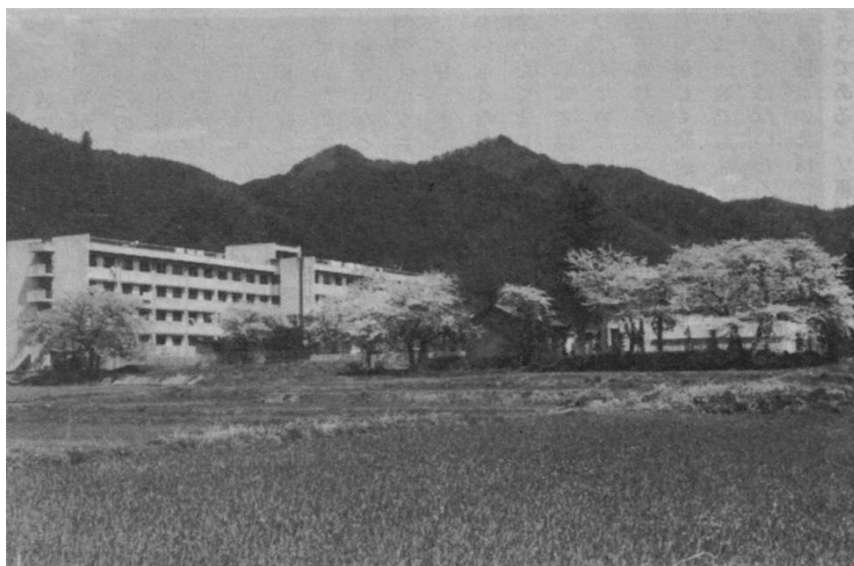
中央区・市立病院支部 森岡 康祐
(鹿児島市立病院)

昨年の10月初旬、東京で開催された学会期間中の夜、大学の後輩3人と食事会をもった。いずれも「山形大学学寮」のOBであり、約30年ぶりの再会であった。私のスケジュールに余裕があったので、予め連絡を取ってアレンジしてもらっていた。外堀に面した地上20階の居酒屋で、夜景を眼下にaround60男4人の飲み会である。うち2人は都内のいずれも著名な病院の脳神経外科部長と消化器内科部長、もう1人は小児科クリニックの院長になっていた。

「山形大学学寮」は旧制山形高等学校学寮を起源とする由緒ある寮である。かつて木造の寮が山形市の中心、小白川キャンパス内にあったが昭和43年に解体され、現在は学内に記念碑が建っている。後に鉄筋コンクリート4階建ての「学寮」が、山形市の東南、千歳山（ちとせやま）南麓にある焼き物の里「平

清水」（ひらしみず）に定員300人の男子寮として建てられた。教育学部寮と女子寮は大学近くに別にあり、「学寮」は人文学部、理学部、医学部の学生と、工学部（米沢）、農学部（鶴岡）の教養課程の学生を対象にしたものである。とは言え、医学部生の先輩あるいは同輩は教養課程または卒業までに退寮されたので、卒業するまでの6年間を学寮で過ごした者は私の前にはいなかった。

北杜夫の「どくとるマンボウ青春記」とカバー挿絵（中公文庫版）に高校生の私は惹かれて、迷わず大学での寮生活を決めていた。今思えば「青春記」とは時代を異にするものの、期待に違わぬ寮生活であった。昭和55年入学式当日未明、新入寮生はコップ持参で寮の玄関に集められ、そのまま向かいに聳える標高約500mの「千歳山早朝登山」が始まった。頂上に着くといきなりコップ酒の洗礼を



学 寮 遠 景

受け、先輩の「寮歌」を拝聴した。一汗かいて山頂で飲む冷たい酒は格別で、今でも鮮明に覚えている。今まで飲んだ中でも最も美味であったかもしれない。翌年の登山リーダーの任には私が就いた。

寮内の和室ラウンジや食堂などでは頻繁にコンパが開かれ、「ストーム」では各部屋を訪室（乱入）した。毎年秋の「寮祭」は各階対抗で、前夜祭に始まり仮装行列、演芸会、深夜マラソン、運動会など寮内外で多彩な企画が催された。傍らにはいつも種々の銘柄「初孫」、「出羽桜」、「住吉」、「大山」、「男山」など地酒の一升瓶があった。事あるごとに寮歌が歌われ、定番は大正11年度卒業生寄贈寮歌「ひかり北地に」、大正12年度全寮寮歌「嗚呼乾坤」、昭和9年記念祭寮歌「人生赤き」などであった。ちなみに「ひかり北地に」は、旧制山形高等学校の寮を舞台に、イリオモテヤマネコの発見者でもある動物作家、戸川幸夫が同名の小説を上梓されている。

窓の外には「千歳山」と寮を挟んで対峙する「戸神山」（とがみやま）が聳え、その麓からは田園風景が広がり、ときおりニホンカモシカが徘徊していた。ボイラーが止まる冬休み期間中に越年する寮生は「平清水越冬隊」と称して雪の深夜、一升瓶片手に除夜の鐘、初詣に連れ立って出掛けた。総じて学寮生活とは兎角賑やかで落ち着かず、勉学に適した環境を好む一般学生、殊に医学部生からは敬遠されがちな居住環境ではあった。しかしながら、私に続いて卒業まで在寮する医学部生も現れ、今回のメンバーのほかにも国際的医療活動家や医学部教授など、各方面で活躍する多士済々を輩出している。

そうした「学寮」も時代の趨勢により、10数年前に強制退去の末、取り壊しの運命を辿り、平成15年に女子寮も併設された各室ユニットバス・トイレ付きの近代的スタイルの寮に新築され、名称も変わった。かくして昭

和の時代、私達が学生生活を謳歌した「パラダイス学寮」はもはや記憶の中に留まるのみとなった。

さて30年ぶりの学寮プチOB会。学生の頃と変わらぬ面影を目にした瞬間、懐かしさと共に何やら寮生特有の連帯感のようなものが蘇った。既にそれぞれの家庭を持ち、様々な職歴を経て誰もがそれなりの風貌を備えていた。お互いのその後の経緯や近況などを報告し合い、取り留めのない話に終始したが、その場に同席すること自体を愉しんだ夜であった。30年前に一拳にタイムスリップしたと同時に、30年という歳月の重みも実感した。